さくら インタビューシリーズ by 村上博美 3

林由佳さん

本場のアメリカで自分の力を試したい
圧倒的な数の読者からの反応に手ごたえ
林 由佳さん ウォール・ストリート・ジャーナル記者

日本で生まれ育ち、米国の主要紙であるウォール・ストリート・ジャーナルの記者として第一線で活躍を続ける林由佳さんにお話を伺いました。ロイター通信、ダウ・ジョーンズ経済通信で記者として東京、ニューヨークでの勤務後、ウォール・ストリート・ジャーナルへ転職し、東京特派員を経て副支局長として11年間東京で勤務されました。

―今のお仕事の内容を教えていただけますか？

ウォール・ストリート・ジャーナル（WSJ）のワシントンDC支局の記者として働いています。私の担当しているのはアメリカの政府の金融規制です。政府の政策がどのように消費者に関係するのか、彼らの関心事である住宅ローン、学生ローンなどにどう影響するのかという記事を書いています。ワシントンの前は東京支局で副支局長として、日本の経済、政治、外交など幅広い分野をカバーし、特に福島の原発事故の取材もしていました。

―ジャーナリストになったきっかけは？

大学を出たのはバブルの終わり頃。高校生のときにアメリカに交換留学し、英語も多少できたし大学で経済を専攻したので、就職には困らない時期でした。私は当時、まずアメリカに留学して国際関係の勉強をし、世界銀行や国連で働きたいという希望を持っていました。ただ、大学院に行くにはまずお金を稼がなくてはいけない。そこで英語を使って金融業界で何年か働きたいと思って、外資系の金融機関を受けたのですが、なぜか全部落ちました。第2希望はジャーナリストになることでした。日本で新聞記者になる人は「四字熟語」をはじめとして、たくさん勉強しなくてはならないのですが、私はあまり勉強していなかった。なので、あまり期待していなかったのですが、3社受けて2社内定がでました。そこできっと向いているのかもしれないと思いこの道に入り、やってみたら面白かった。いろいろ悩みながら進んできましたが、気が付いてみると30年以上やってきたという感じです。

―日米両方で働いていらっしゃいますが、アメリカにくるきっかけは？

アメリカに住むのは4回目です。最初は高校生で行った交換留学。大学では経済を専攻したら周りは男性ばかりで居心地はあまり良くなかった。就職面接で「結婚したら仕事を辞めるか」といった質問ばかりする日本企業ではなく、そういうことを一切聞いてこなかった外資系の通信社に就職しました。その当時、世界各国から日本で働きたいというジャーナリストが東京に集まっていて、そういった同僚と一緒に仕事をしていると、あまりに勉強していない自分が恥ずかしくなりました。2年ほど仕事をしたところで逃げるようにアメリカの大学院に留学しました。コロンビア大学でジャーナリズムを勉強した後、帰国し、記者仲間のアメリカ人の夫と結婚。通信社で働いていました。

アメリカの会社に働く以上、やはり本場のアメリカで自分の力を試したいと思っていたところ、ニューヨーク本社に転勤するチャンスがあり、金融関係の記事を5年ほど書いていました。そのあと、東京でポジションに空きがでたから行かないかと言われWSJの東京特派員として日本に戻りました。東京に転勤して最初は金融関係を担当していましたが、そのうち国際関係や政府、震災の後は福島の人たちを追いかけたりしていろいろ幅広い分野をカバーしていました。10年ほど東京にいたのですが、後半は副支局長として、若い人たちへ指導したりしてやりがいもありました。そのまま東京で仕事を続けていく選択肢もあったのですが、10年ほど東京で仕事して、何かもう一回アメリカで力を試したいという思いがありました。また、子供がちょうど大学に入る時期だったこともあり、希望して4年前にワシントンに転勤してきました。

―ジャーナリストのお仕事をしていて、つらかったこと、楽しいことは何でしょうか？

日本にいて日本の記事を書くことは楽しい。実際に起きている現象をみて、多くの人にわかりやすく説明する自信がある。けれど、東アジアや日本のことを一生懸命記事に書いても、アメリカにいる読者は興味がある人は読むけれど、多数のアメリカの読者に読んでもらうことはとても難しい。

日本経済が繁栄していた時は、日本の記事を書いても書きされないくらい扱っていましたが、日本の経済が経済が勢いを失い、その代わりに中国が台頭してくると、日本の記事に対する需要は少なくなっていきました。ニューヨーク本社のエディターに「（私の記事を）使ってください」というのですが、どんな子供時代を過ごされましたか？

生まれも育ちも日本です。小中学校は公立へ行ったのですが、低学年の時は違和感がなかったのに、小学校の高学年くらいからずっと窮屈でした。私の人生で一番暗い時期は小学校の後半から中学校にかけてです。私は、やたらにいろんなことを「なんでそうなの？」「どうして？」と納得するまで聞いてしまう性格。そのため先生から煙たがられて、居心地が悪かった。そこで、学校ではあまりしゃべらないことにしようと決め、家に帰って本をたくさん読んだり、英語の勉強などして羽を広げていました。高校から私立に行って、窮屈さがなくなりだいぶ楽になりました。

―ジャーナリストの魅力、記者として大事にしていることは何ですか？

ジャーナリストの仕事は楽しい仕事です。でも周りはアメリカ人ばかり。私はネイティブでないので長い間、母国語でない英語で勝負しなければいけないのは、大きなハンディだと思っていました。でも、さすがに20年、30年とキャリアを積んでいくうちに、この国には、英語を母国語としない移民で成功している人はたくさんいるから、もうそれは言い訳にならない、と思うようになりました。そして今は、英語で書くことによって、日本語で書くより圧倒的に多くの人に自分の記事を読んでもらえる。そのことに大きな意義があると思っています。ほかの人と違うことを心配せずに、「アー」というところは自分の意見を言い、一匹狼的に仕事をしています。

ジャーナリストとして大事にしていることは、常にフェアであること、固定観念にとらわれず、好奇心を失わないこと。そして、取材が完了と思ったところで、もう一件取材をしてみること。できる限りたくさん活字を読むこと、ですね。一番の醍醐味は、「記者」だということでいろんな人に会える。記者証を持っているだけで、いろんな人が心を開いてくれる。それだけ自分を信用してくれることなので感謝している。多くの人に読んでもらうために、これからも頑張っていい記事を書いていきたいと思います。

―真摯に向き合い、徹底的に取材して納得した記事を書くという姿勢が林さんの活躍の基なのですね。記事に林さんの名前を見つけるのが楽しみです。

仕事中の林さん

インタビュアー
村上博美 むらかみひろみ
Japan Institute for Social Innovation and Entrepreneurship (JSIE) 代表。日本と米国にてグローバル人材育成ワークショップを開催。ワシントンDC経済戦略研究所(ESI)や戦略国際問題研究所（CSIS）などの研究員を務め、2015年に503(c)3非営利団体JSIE（www.jsie.net）を創設。米国際経営学修士、米国ジョンズ・ホプキンス大学高等国際問題研究大学院（SAIS）国際関係論博士。

タックスリターン
確定申告・経理代行・会社設立

日本語フリーダイヤル ファックス
1-877-827-1040
電話 305-233-6551
メール info@1040me.com
ワシントンDC&ヒューストンの方はディスカウント
尾崎真由美会計士 住所: 9900 SW 168th Street Suite 1, Miami, FL 33157
Website: 1040me.com
共著「中小企業の資金調達方法がわかる本」法人税申告または会社設立お申し込みの方に無料でさし上げます。

2019年度
SuguCOCO セッション 夢

日程 8月21日(水)～8月23日(金) 9:30 - 2:30
8月24日(土)夕方 一般公演
場所 St. Thomas Episcopal Church (McLean, VA)
o-en network
日本とニューヨークから来る日本人のプロのダンサーたちと一緒に、現代文化を通してみんなで協力することの楽しさを教えてくれます。
詳しくはウェブサイトをご覧ください。www.o-en.net